



三十日
三十二日
归在所伊和山
十二月二十日
漢南集
十二月二十九日
誠子昇北城

卷之三

早稻田大学図書館
文書27
D 54

黑面
白面
淡妆
伊人
并肩
伊人
上井
伊人
并肩
伊人
并肩
伊人
并肩

明治堂藏書

明治卅三年輸入增加以爲波追國計首唱者病
之金貨實溫生之廉之皆獨一亡國漏也世之
指事之目的山縣内閣松方雪舟計之破壞
先之于之間伊藤升上里幕上之星亨
を使営トハ政友会之組織トハ山縣内閣之
驅逐トハ而伊藤内閣之強制的ノ命運送
す波多大老自是ニ眞信ト大臣行
四十七年會收縣之廉之之國亨之政友會中
國里之子少々入掌中も大藏大臣波
多之通傳大臣星の間財政滿而政工少半

臣ツツイ少姫れそ伊藤音相之を制御
候

是年光十九月ノ後迄國部伊藤初麻道
接處瀬昂伊藤意在ハ星ミ大老の揚
さシ與ヘん事より想像一非希トニ疑ひ少
伊藤衡はみたゞ伊藤病中温言おゆる
升上主國主モ調停ニ努メヌリ又國部元
千秋も之際伊藤井上主内官多謝行奔
主せし前國朴心地一朝、後之へて少
少伊藤指揮ヲ失ヒテ却る餘端の友
厚々姪ニ端議行駁テ伊藤も内閣組織

天命を承りて瀬昂主七珍故大老弔
平間伊藤左右相若禽荷征解モ少數
奔立いたゞ一益モ少候栗伊藤左右相モ九
日新國貿人親往シ處ハ改名國即ち御深
之如大老と再轉モ山縣内閣主五臘
三旗ニ協奏モ去れシ波多ニ暎拂ニ付總
事水ノ世主稱ヤ多斗源モ伏見武
岡流傳跡トハ傳國。社屋も一指
碑也。又伊藤八方善人少數も其
毒也。一種。相候モ御付遣事似行
後理拜命九月も歸附御理ニ西園寺

ヨリ命シテ不事シテ始タメシ南シテ身熱ヒヤク
ニ舞ヒラフ也シテ、賓境ヒンジ來カム于アリ玄國クシキ也シテ。
多ハ而ハ升ス上ス大シ危ク博ト、シテ昇ス到ルトシ。湯
多ハ多ハ學シテ節シテ御シテ被カツ之シテ。一シテ壁シテ也シテ。伊シテ
御シテ御シテ伊シテ被カツ之シテ。伊シテ被カツ之シテ方カタ之シテ想シテありシテ。升ス上ス
之シテ中シテ真シテ前シテ金カネ、小シテ刀シテ出ス相シテ有シ也シテ。
道シテ寧シテ此シテ也シテ。九月二年六月山腰サンイ御シテ理シテ難シ誠シテ
十月十九日イシ御シテ御シテ理シテ難シ誠シテ。庚子十月
廿八日イシ農シテ活シテ至シテ漫シテ。

辛亥年ハサヘ清シテ北シテ惠シテ義シテ和シテ圓シテ結シテ

十月三十日

一清帝而娶着シテ新皇太子シテ同シテ慶

達シテ也シテ

一孫文深シテ被カツ超シテ繼シテ累シテ自シテ說

外シテ象シテ列シテ國シテ公シテ使シテ倉シテ候

一端シテ親王シテ處シテ罰シテ或シテ死刑

一償屋シテ德シテ萬國シテ六年シテ列シテ方シテ今シテ也シテ

一天津シテ列シテ國シテ共シテ有シテ也

一北京シテ二千人シテ發シテ佈

一元兇シテ端シテ魏シテ王シテ莊シテ親王シテ載シテ淵シテ怡シテ親王

剛シテ親シテ道シテ厥シテ英シテ身シテ董シテ福シテ祥

時事

一西園寺侯政友會黨に極密院議長に任務せし事の誠説也

一東京市參事會員給水鉛管收賄一案に令多十名市參事會職員全四人^{六人候選}被成根元三千圓沙勿の金を取つたす
市民沸騰也

一伊藤侯二十九日大藏を出でニ三國に熱西
靜志相馬と歸り十月下旬大藏ヲ御
禁罷矣

一十一月廿日午後三時大藏ヲ笠山内未松謙

澄之元由萬、源通不益而國主権家同軍
一十月吉西園も臨時代理、總理も解く
一十二月二十六日議院召集

一四月二十六日議院召集式

天皇臨御御内膳御選候

一五月廿七日伊藤以破

一議會召集前日廿日源通信大臣辭

職并原敬任通信大臣

一十一月廿三桂隆平大臣辭職兒玉素齋

裕智兼佐澤軍大臣

一月上島津大儀表示國部と訪問共て

伊藤之滄浪聞事

三十四年

一月十九日傍
伊藤東齋
議會
院新設稅糴糖及酒類
據稅司額之議
案
年々金萬錢千萬回費
院大概不變
成爲了運
詔勅
成立直此之議
院設
設追差相
機一擱
再將前議
會沒識
以遣練
計算
之主張
之御
主臣悉皆宣佈
伊藤首先於之力
在之之御
主臣
了內閣
然也
星多
不內閣
主臣
而參事
厚之懸
而難
之
主臣

ら行
黒田信政
一九處於大瀧止

予更取
和紙を拂
之
方使
様子
御衣
様大嘆
營幕
天皇陛下
親御奉上
隆大内閣
之役
之役

説く

西元八二年八月
不枝ノ所
誠一
之江

三十六年八月丁巳
舊抄